開催地名：石川県能美市	
開催日時	令和３年２月 14 日（日）　13：30 ～ 15：00
開催場所	能美市防災センター
語り部	大内　幸子　　（宮城県仙台市）
参加者	町会・一般市民　62 名
開催経緯	当市では、昨年度より「我が事丸ごと防災プロジェクト」を立ち上げ、あらゆる生活シーンに防災があるという考え方のもと、幅広い世代やジャンルでいろいろな切り口から防災の学びを提供し、各種防災啓発を試みているところである。一方、地域によってはまだ行政に頼りがちな面もあり、特に「自助」「共助」の取り組みを促す防災意識の醸成や、地域防災力の向上などについては、実体験に基づく生の声をいただくことは大きな効果が期待できると考え、本講演を実施することとする。
内容	（１）震災発生時の状況 震災当日、私は宮城県仙台市福住町にある自宅の２階にいた。激しい揺れがあった後、すぐに小学校へ駆けつけて、子どもたちの安否確認や地域の皆さんの避難誘導を行った。さらに、私たちの町では一人暮らしの高齢者の方や支援を必要とする方など、いざという時に助けが必要な方の名簿を作っていたので、その方々の安否確認も行った。マニュアルがあったので、落ち着いて行動することができた。 これは後に「福住町方式」として全国に知られることとなる。想定外の大地震にも関わらず迅速に行動できた理由は、日頃からの防災訓練と、防災・減災への高い意識だと思う。仙台市内外の町内会・グループとの「災害時協力協定」を結んでいたのも、当時としては珍しい福住町ならではの取り組みだった。これにより、物資支援や人的支援、情報提供といった災害時のサポートをいち早く整えることができた。行政の支援を待たずに炊き出しを行うこともできたし、さらに、大船渡、気仙沼、女川などの被災地に支援物資がなかなか届いていないという状況を知り、他の避難所に町内会長のマイクロバスで届けに行くこともできた。自分たちがこれまで当たり前にやってきた訓練が、災害時にしっかりと役に立つことが分かった。 （２）避難所での気づき 東日本大震災発災時、私は福住町内の集会所や、近くの指定避難所である高砂小学校の運営に参加した。防火・防災訓練は日頃から行っていたが、ここまで規模の大きな避難所運営は初めてだった。実際に避難所で活動してみると、女性の視点が圧倒的に足りないということに気づいた。当時の町内会長や自主防災組織の役員たちはほとんどが男性で、既存の防災マニュアルに関しても男性の視

	点で作成されていた部分が多かったため、例えば、避難所に更衣室や授乳室がないことや、トイレが男女別になっていないなど、どうしても細かい部分に手が届かない状況が発生した。そうすると、妊婦や幼い子ども、高齢者や障害のある方々など、いわゆる「災害弱者」の方々にしわ寄せが行ってしまう。もちろん、男性の運営を否定するということではなく、災害時は男女それぞれの視点を尊重しながら、助け合うことが必要だということを強く認識した。 （３）地域のつながりの女性の役割 　地域の行事がさかんで、住民たちが日頃から顔見知りであるということは、福住町が「災害に強い町」と言われるゆえんでもある。地域の中で自然と「見守り」の体制が生まれ、自分ごととして防災・減災を考えられるようになるし、行政に頼らない地域防災のあり方を考えていくことが、突然の災害時において多くの住民の命を救うことにつながると思う。皆さんの地域においても、是非ともこの「地域のつながり」を推奨したい。 　現在、福住町の夏祭りの運営を担っているのは、半数以上が女性たちだ。彼女たちは子育てをしていたり、仕事をしていたり、家事があったりととにかく忙しいが、だからこそ、短時間で効率よく準備や後片付けを行う工夫ができる。スマートな運営を行う工夫によって、役員の負担を減らし、今も続けることができている。そして、地域活動の中心に女性がいることで、各家庭の行事参加率が上がり、結果として防災・減災に必要な「地域のつながり」を作ることができる。女性たちが地域で活躍することで、防災・減災のレベルは着実に上がっていくと断言できると思う。
開催地より	地域住民が一体となって、自分たちの町は自分で守るという意識と行動が必要であり、女性の参画が重要であることを理解できた。今後は自主防災組織主体による避難所運営の取り組みを強化し、女性をリーダーとしたモデル自主防災組織の立ち上げを検討していきたい。